狹霧所成神御名多紀理毘賣命（此神名以音）

〔古事記傳 十七〕氣吹は息吹なり（伊とのみ云も即息なり）大祓辭に、氣吹戸坐須氣吹戸主止云神、根國底之國爾氣吹放氏牟、式に、近江國坂田郡、美濃國不破郡などに、伊夫伎神社と申すもあり、

〔徒然草 上〕是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各あそぶ事有けるに、醉て興に入あまり、かたはらなるあしがなへをとりて、頭にかづきたれば、つまる樣にするを、鼻をおしひらめて、かほをさし入て舞出たるに、滿座興に入事かぎりなし、しばらくかなでゝ後ぬかんとするに、おほかたぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせんとまどひけり、兎角すれば首のまはりかけて血たり、たゞ腫にはれみちて、いきもつまりければ、うちわらんとすれど、たやすくわれず、

〔陰德太平記 五〕大内勢取圍銀山櫻尾兩城附次休藏主事

一手ハ義隆ニ、陶兵庫頭持長入道道麒ヲ相添、二萬餘騎ヲ以テ、藝州佐東ノ銀山ヘ押寄、十重二十重ニ取圍ム、一手ハ義興自將トシテ、一萬餘騎同國草津ニ保島兩城ヲ攻落シ、頓テ廿日市ノ櫻尾ノ城ヲ取卷、息ヲモ不繼攻戰フ、

〔新撰字鏡 鼻〕鼾 嘷（同、干岸、下旦二反、去、久豆和、又伊比支、） 肆（許至反、去、臥息、伊比支、）

〔運歩色葉集 伊〕鼾

〔書言字考節用集 五 肢體〕齂（説文、臥息也、） 鼾睡（同） 鼻息（同、韓文）

〔倭訓栞 前編 三 伊〕いびき 新撰字鏡に鼾をよめり、息引の義也、源氏物語にいびきとか聞しらぬ音と見えたり、或は齙鼧をよめれど、齙は齁の誤成べし、鼧字は所見なし、

〔和漢三才圖會 十二 支體〕鼾（音翰） 齂（音喜） 俗云以比木

按、鼻息曰齁鼾也、臥鼻曰鼾、性有鼾音高者、有無音者、而音高者、夜聽悟目易覺、

〔枕草子 二〕にくきもの